

【巻頭言】

英語によるコミュニケーションのすすめ

竹村治雄

大阪大学



20年前に比べると外国発表が実に簡単になった。簡単になったというのは、気軽に外国発表が可能になったということである。たとえば、会議の参加申し込みやホテルの手配は電子メールやWebですむ。論文の投稿も電子投稿が一般化しつつある。もちろん、航空運賃が以前に比べるとずいぶん安くなったことにもよる。というわけで、様々な国際会議で日本人による発表を聞く機会が多くある。

そのような場では、日本人のプレゼンテーションスキルも格段に向上していると感心する一方、日本人の英語力自体はそれほど向上していないとしばしば感じる。むしろ、中学や高校での習得する英語の内容が会話力重視となり、英語そのものの学力は低下しているのかもしれない。そういうこともあってか、文部科学省も『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想』を先ごろ発表した。日本人の誰もが英語を自在に使いこなす必要があるのかはいささか疑問であるし、英語の前に日本語能力の低下を憂う声も聞こえてくるが、これから英語での口頭発表を経験するであろう学生会員諸氏に、あえて英語によるコミュニケーションについて私見を述べさせていただく。

英語が使えるということ＝英語によるコミュニケーションができる能力ととりあえず考えて話を進めよう。すると、そもそも「コミュニケーションとは何か？」から考える必要がある。コミュニケーションとは、自分以外の人間に対して、自分の意思を伝え、相手の主張を聞き取り、双方向の譲歩伝達を行い、そして最終的に様々な問題に対して共通の認識を持つ、すなわち、お互いが、お互いの立場を理解できる定常状態に達するための情報

伝達過程であるとわたしは考えている。

おのずと、そこにはコミュニケーションを行う人間のもつ情報の質や情報量によって、力のバランスが生じる。研究発表の例で考えれば、非常に優れた研究を発表する場合は、必ずしも発表者が英語によるコミュニケーション能力に長けていなくても、聴講者が真剣に聞いてくれる。そして、何とかコミュニケーションを確立し、重要な研究成果を理解しようと、聴講者が歩み寄ってくれる。一方、研究内容がそれほど斬新と思えない場合には、発表者の方から、強力なアプローチを仕掛けないと、こちらの主張に関心を持ってもらえない。いつでもすばらしい研究内容を確保できるならともかく、普通の（内容の）研究発表に関しては、どのような状況にも対処可能な最低限の英語によるコミュニケーション能力を身につけることが必要である。そのためには、不断の努力が必要である。

さて、コミュニケーションは、当たりまえのことだが、一方通行ではまずい。必要な情報が相手に伝わり、且つ相手から必要な情報が得られる、双方向の情報伝達が必要である。よく、英会話の話になると、「話すのは何とかなるが、聞き取るのが苦手だ」とか「発表は良いが質疑応答が苦手だ」という話を聞く。しかし、これではコミュニケーションは成立しない。むしろ、「話すほうが苦手だが、聞き取りは完璧」なほうが、コミュニケーションは成立しやすい。というのは、自分の主張は自分の使える言語能力の範囲内で表現できる形式に言い換えて話すことはできるが、相手の話すことを自分のレベルに合わせてくれるかどうかは相手次第であり、普通はそのような状況にはならない。

このような理由から、英語によるコミュニケーションではリスニングが重要であると常日頃感じている。さて、リスニングのポイントであるが、第1に相手の発声を的確に把握することが重要である。残念ながらこれは慣れるしかないのであるが、今日では非常に多くの英語教材が用意されていると同時に、教材でなくても練習用の素材が簡単に手に入る。DVD ビデオに収録されている映画はたいてい英語音声に加えて、英語字幕が収録されており、必要に応じて表示することができる。このためリスニング用の練習素材として用いることができる。具体的には字幕表示なしで英語を聞き、それを聞き取る。次に字幕表示をみて聞き取った内容が正しいか確認する。これを繰り返すことでリスニング力を身につけることができる。要点は自然なスピードの英語の聞き取りになれることである。

個々の単語がクリアに聞き取れるようになると、格段に理解度が上がるはずである。しかし、それだけではリスニング力は強化されない。すなわち第2のポイントは豊富な語彙力を身につけることである。会話のための語威力とは、単語の意味を知るだけでなく、その単語の正確な発音とアクセントを把握しておくことである。間違った発音やアクセントを覚えていると、とっさに正しいアクセントの単語を聞いたときに認識できないことになる。

第3番目に重要なのは、意味を把握するための訓練である。このためには、英文を前から順番に読んで理解できる能力が必要である。私たちが、日本語の文章を読む場合は、順に前から読み進み、よほどの難文で無い限り一度で意味が理解できる。英語はどうだろうか？ 単語の意味を確認しながら何度も読み返したりして意味を確認することが多くないだろうか？ これは、英語と日本語では構文が違うため、意味を理解するために語順を並び替える作業をする癖がついている人に顕著に見られる。普段から、このような方法で英文解釈をしていると、会話のように先頭から順に言葉を流し込まれる状況では、単語は聞き取れるが文章としての意味を理解できな

いことになる。では、英文を前から順に理解するためにはどうすればよいだろう？ これも、基本的にはそのような方法で英文解釈をする、すなわち、必ず前から後ろに読んで意味を理解する癖をつけることである。普段から論文を講読するときそのような癖をつけると良い。読み返すときも前から後ろにたどるのである。以上がリスニングに関して、わたしがポイントだと思っている3点である。

話すほうはどうだろうか？ リスニング力が向上するといろいろ使えそうな口語表現がわかるようになる。話す場合もそれを応用すればよい。重要なのは、何かを主張するときの論理的な組み立てと、英語による表現をどうするかである。学会発表では、発表自体はあらかじめ発表原稿を作成することで、論理的な組み立ておよび誤りの無い英語表現を準備することが可能である（事前の英文チェック等も活用する）。学会発表で、真の会話力を求められるのは、質疑応答である。だが実際はリスニング力が欠如して、質疑応答がうまくいかない例が多い。相手が質問している内容が不明瞭なまま、あて推測で質問に答えるのは大変危険である。まず、相手の質問を正確に理解すること、そのためには発表者から質問者に再度質問内容を確認する質問をしてもよい（そのための英文を用意しておく）。あるいは、事前にチェアに質問が聞き取れないときは、言い換えてもらうようにお願いしておくのが良い。次に、質問内容を的確に把握したならば簡潔に答える。特に YES / NO で答えられる質問の場合は、最初に明確に YES か NO で答え、次にその理由を述べるとよい。

いろいろ書いたが基本は慣れることであり、そのためには努力が必要だということである。また、失敗を恐れず、自ら英語環境に飛び込んでゆくのも良い、特に様々な会議で学生ボランティアを募集している。そういったところへも積極的に応募すると良い。将来、英語発表の苦手意識を克服するために、バーチャルな発表体験で練習することが一般化するかもしれないが、そうなっても語学の習得に努力が必要なのは変わらないのである。

【略歴】

竹村治雄 (TAKEMURA Haruo)

大阪大学 サイバーメディアセンター 教授

1982年大阪大学基礎工学部卒業、1987年大阪大学大学院博士過程修了(工学博士)。1987年～1994年、国際電気通信基礎技術研究所(ATR)勤務。1994年より奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科助教授。1998年10月～1999年7月 トロント大学工学部客員助教授。2001年4月より現職。主に Human Computer Interaction(HCI)、3-D GUI、CSCW、VRの研究に従事。本学会理事。